

「酒ではなく、聖霊に満たされなさい」

エペソ人への手紙 5 : 1 8

April.6.2025

エペソ人への手紙 5 : 1 8 (パウロ)

Preface

意味深げな、ある意味面白い聖書箇所だと思います。

私にとっては、ホッと出来るような神の言葉です。

どういう意味でホッと出来るのかと言いますと、「あ、お酒を飲まなくてもいいんだ！ 飲む必要はないんだ！」という安心です。

小学校高学年の頃から兄たちに、「お前はそれでっかい図体だし、親父ばかりか、酒で滅びた洪家の血筋で、酒飲みの人相だから、絶対大酒飲みになる」と言われ続けてきましたが、お酒は一滴も飲みません。

私にとってお酒は、幼い頃から、決していいイメージのものではありませんでした。

軽くトラウマのようになっていたように思います。

Part One

お酒はいいもの、お酒はカッコいいもの、お酒は大人としての教養、お酒はリフレッシュ・ストレス発散、お酒は伝統、世代を超えて引き継ぐものであり、成人した我が子と酒を飲み交わすことに憧れを抱き、お酒を飲み交わしながら人との距離を縮めて行き、酒なしの接待は有り得ないし、親密な人間関係を構築する上でお酒は必要なツールだというような風潮が当たり前のように毎日、テレビや雑誌や広告などのメディアを通してだだ洩れのように流され、その盲目的とも感じてしまうお酒の啓蒙活動を当たり前のように受け入れている人や社会に対して、小さい頃から違和感をずっと覚え続けてきました。

私が大学生になる時、大きな不安が一つありました。

それは、大学生になったら、お酒を飲まなきゃいけない、お酒を飲まされる、新入生歓迎会でも、部活の飲み会でも、先輩から勧められたらお酒を断ることなんかあり得ないという不安でした。

私が大学生になった30年前と今とは、20歳以下の飲酒に対する規制が厳しくなりましたので、全然違うと思いますが、私が大学生になった頃、上級生たちが作った新入生歓迎会のパンフレットのようなものに、私の通った大学の学生たちが急性アルコール中毒で運ばれて行く病院として紹介されていたのが、「メディセン」こと筑波メディカルセンター病院でした。

当時の私は、「大学生という大人のような身分になったんだから、お酒の味も覚え、お酒との付き合いを覚えなくちゃいけないし、覚えさせられる」ということに強い違和感を覚えていました。

それでもまあ、大学生になって、へべれけになるまでお酒を飲んだ飲まされたことが3度程ありました。

ですので、クリスチャンになってから聖書を読み始め、旧約聖書に出て来るダニエルが、捕囚として捉えられて行った先のバビロン帝国の英才教育プログラムに取り入れられた時、誰もがそのプログラムを当たり前のように受け入れ、むしろ、榮譽や名譽にさえ覚えていた雰囲気の中で、ダニエルと三人の友人たちが、それまで誰もそんな申し入れをしたこともなく、申し入れをすることさえも考えられなかったようなところで、「王が食べるごちそうや酒で身を汚すまい」と心に定め、「身を汚さないようにさせてくれ」と、ある意味、命を懸けて申し出に、小躍りするような思いが致しました。

まことの神を信じる者のからだは、神によって聖なるものとされた神の霊が住まう神の宮であり、その重要さと深刻さを日々の暮らしの中に表そうとした、貫き通した姿に感動と励ましを覚えました。

「お酒を拒絶していいんだ」という安心感を覚えたことを覚えております。

そのためか、このエペソ書5：18の「酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです」という御言葉に、ホッと出来るような安心感と、身をもって同意出来るような思いになります。

私が幼い頃、毎日お酒を飲んで怒る父が大嫌いで、怖くて仕方がなかったということを以前お話したことがあると思いますが、でも大人になって父のことを考えますと、在日韓国・朝鮮人として嵐のような民族差別の中を生き抜いた父の痛みだったり、生身の人間としての弱さだったり、命を懸け命を削りながら家族を守ろうとしたプレッシャーだったり、椎間板ヘルニアで感覚の無くなった足を引きずりながら、一日中工事現場で汗だくになりながら働いて疲れ切った心と体のことを思い返しますと、今となっては、「お父さんにとってのお酒は楽しみだったし、休息だったし、そりゃ、酒飲まなきゃ、やってらんなかったらなあ」と十二分に思えますし、そんな父の生き様に同情でき、愛おしく、また申し訳なく思えてきます。

でもやっぱり、父以外にもたくさんのお酒を飲んで怒っている大人の姿だったり、お酒を飲む前までは大人しかかったのに、急に乱暴な言葉を発したり、現実逃避の愚痴を吐露したり、暴力的になったり、ののしり合いながら喧嘩したり、酒を飲まなきゃ出来ないような良くないことを平気でするようになったり、もうそれ以上お酒を飲んだら死んでしまうのに、結局死ぬまでお酒を飲んでいたり、お金が無いのにお酒だけは買ったり、お酒を飲まなきゃ深い話が出来ないとか、心のうちを吐露することが出来ないとか、お酒を飲むことで自分を大きく見せようとする姿とかを、小さい頃からさんざ見てきたせいとか、私にとっては、お酒をたしなむ程度に飲むということまで含めて、お酒を飲むことは無益のように思えてしまい、空しく思えてしまいます。

すみません。言葉が過ぎるかもしれませんが、私にとってお酒とはそういうものです。

「酒を飲めない、飲まないなんて、人生の大部分を損しているよ」という言葉を掛けられることがあります。が、「いやむしろ、お酒を飲まなくていい、酒に酔う必要を感じない、飲みたいとちっとも思わないことに幸いを感じています」という思いになります。

Part Two

またそれと同時に、「酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです」という言葉に続く、「むしろ、御霊に満たされなさい」という言葉にも、身をもって同意出来ます。

聖霊なる神様に初めて、何と云えばいいのでしょうか、私という存在の一番奥の奥、核のような部分に触れられて、「ああ、イエス様！」と泣き崩れながら信仰告白をしたことを思い出します。

それまで、イエス・キリストのイの字も知らなかったような私が、「イエス様はあなたのことを愛していますよ。イエス様が全てですよ。イエス様を知って人は初めて幸いになれるんですよ」と、怪しい、一見しますと「この人酔っぱらってんじゃないだろうか」、または、「変な宗教にどっぷりハマってしまった哀れな人」と思われても仕方がないような事を、何の躊躇もなく平気で言えてしまっている。

いつのまにか、自分の生粋の罪深さに、何とも表現し難い申し訳なさを覚えている。

にもかかわらず、救われている。

罪と戦うことを諦められない。

そして、御霊の実である「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」というキリストの品性が実るよう、聖霊に導かれている途上にあるという事実が、申し訳ない程にありがたい。

何よりも、聖霊の宮とされるために、私という存在そのものが、イエス・キリストの救いによって新しく造りかえられた。

世の中に酔って空しい大胆さを誇る代わりに、永遠に続くことに対する大胆さを体現させて頂きたいと、聖霊の満たしを祈れる。

悟った主のみこころがあるならばそのみこころに生きられるよう、聖霊の満たしを喜んで求める者へと変えられているということに、理性、知性、感性の全てをもって感謝したいと思える人間に変えられているという事実、ただただ嬉しさとともに、恐れおののくばかりです。

それゆえに、申し訳ございません。

少し厳しい、口うるさい説教じみた言葉になってしまうかもしれませんが、

聖霊に満たされることの大切さを知っているはずのクリスチャンが、またはクリスチャン同士集まって、酔うためにお酒を飲むことには、私は同意しかねる思いが致します。

確かに聖書は、お酒を飲むことを禁じてはいませんが、かと言って、勧めてもおりません。

箴言31：6や詩篇104：15等には、「ぶどう酒を心の痛んでいる人に与えなさい。ぶどう酒は人の心を喜ばせ」と、お酒を飲むことの有効性や慰めを語り勧めているような言葉があります。

ですが、飲酒を勧めているように見て取れる聖書の言葉以上に多いのが、飲酒の不必要性や放蕩への警告の言葉のように思います。

ぶどうを栽培出来、ぶどう酒を作れるような土地、作ったぶどう酒を皆で楽しみ味わいながら、その与えられた土地の肥沃さを神に感謝し喜ぶというような描写も聖書の中にもありますが、人は皆が罪人ゆえなのか、なぜだか飲んでいる酒にいつのまにか飲まれてしまう身を持ち崩した姿、いつのまにか、酒が偶像となり、酒を偶像にしてしまっている姿が、聖書の中だけでなく、この世の中にも見ることが出来るでしょう。

Part Three

このエペソ書5：18の面白いところは、全くもって相反する内容であるはずの、「酒に酔う」ということと、「御霊に満たされる」ということを比較している点だと思います。

つまり、「酒に酔うこと」と「御霊に満たされる」ことには類似点があるように見えて、その意味や内容において全くもって違うということですね。

この似て非なるものについて、聖書は色々な箇所でお話してくれます。

例えば旧約聖書ですと、かつて主の霊に満たされた経験があつたにもかかわらず、身を滅ぼすかのように聖霊を悲しませ、聖霊を消してしまい、わざわいの霊に憑かれ、泥酔しながら人に向かって槍を投げつけるサウル王と、槍を投げつけられながらも、主の霊に満たされて、賛美を献げ奏でながら、酒に飲まれ、悪霊に苦しめられるようになってしまったサウル王を慰めた青年ダビデ。

新約聖書ですと、使徒の働きに登場する、聖霊の満たしをもって、大胆に変えられたペテロを始めとする弟子たちの姿でしょう。

恐れで身を隠していたそれまでの臆病だった姿が嘘だったかのように、聖霊に満たされて、色々な国の言葉でイエス・キリストの福音を語り始めます。

そんな姿を人々からは、「あいつら、朝っぱらから酔っぱらっているとは、何と不屈きな者たちなんだ」と嘲られました。

使徒の働きに行ってみましょう。

使徒の働き 2：1－41 (パウロ)

使徒の働き 4 : 1 - 14 (パウロ)

「酒に酔うこと」と「聖霊に満たされる」ことの最も大きな共通点は、「大胆さ」だと思います。

「イエス・キリストを信じた弟子であることがバレると、このいのちが危うい」と隠れて祈っていたペテロが、聖霊に満たされると、大胆にも人前に出て来て、神の救いを、イエス・キリストの福音を堂々と語り始めました。

ところがその姿は、神を信じない人たちにとってしてみると、ちょっと正気を逸した、または冷静さにかける、あるいは、朝っぱらから酒をかつ食らって泥酔した勢いで、大分おかしいことを口にはしているようにも見えました。

面白いですね。

イエス・キリストを信じ、告白し、人にその福音を伝えることは、ちょっと正気じゃないように見えるんです。

確かにそうだと思います。

私も初めて、クリスチャンの方々が礼拝の中でうつむいて祈っている姿を見た時、「ああ、ちょっとこの人たち、やばいかもしれない」と思いました。

でも聖霊に触れられ、聖霊に満たされると、そんなことお構いなしに、真理を真理として、真実を真実として、事実を事実としてただ伝え、ただ生きる。

至って、正気で、理性的で、知性的で、感性に満ち溢れた主のみこころに適う生き方、生きる道でしかないということを悟らされます。

「初めに、神が天と地を造った」という創世記 1 : 1 の言葉に、すべてが帰着することを知ります。

大胆ですね。

本当の大胆さ、神から見て発揮すべきところに発揮する大胆さが、身から滲み出てきます。

空しいことにおいて、別に大胆になる必要のないところにおいて大胆になるのではなく、朽ちることのない、永遠とこしえに関わることにおいて、キリストによって明らかにされた奥義を余すところなく伝えることにおいて、それを生きることにおいて、大胆になります。

真理において、大胆になります。

イエス・キリストという真理なるお方において、大胆になります。

一方、お酒に酔っても大胆になります。

大学生の頃、3回程へべれけに酔っぱらったことがあるとお話ししましたが、その内の1回、村さ来という居酒屋を借り切って、当時所属していた体育会系部活の忘年会でのことでした。

断ることの出来ない部の先輩に勧められるまま、並べた8つのコップに注が

れたビールをドレミの歌に合わせて、へべれけに酔っぱらうまで飲みました。

すると、変な大胆さが自分の中に芽生えてきました。

「日頃からきれいな方だなあ」と思っていた女性のマネージャーの先輩がいたのですが、その方は、部内の他の選手の先輩とお付き合いをしておられました。

それでも、酔った勢いで、ちょっと一度だけ、そのマネージャーの方に声を掛けてみようかと、変な卑猥な思いが湧き上がってきました。

でももし、そんなことをしたということが、お付き合いをしておられる選手の先輩にバレた日にゃ、とんでもないことになるということは何となく頭の隅にチラつくのですが、「まあいいや」みたいな、明らかに間違っている大胆な気持ちになってしまいました。

まあ結果的には、私自身あまりにもへべれけ過ぎて、また、部員のほぼ全員が酔っぱらっていましたので、何だかワチャワチャしているうちに、そのマネージャーの先輩に声をかけることが出来ませんでした。

忘年会が終わった後、何とか寮に戻って部屋に入った瞬間、靴を履いたまま眠りに落ちてしまったのですが、次の日の朝になって、油性のサインペンで顔中体中に落書きされた姿を鏡で見ながら、「昨日の晩、マネージャーの先輩に変なことしなくて本当に良かった、あぶなかった」と胸をなでおろしました。

(今思いますと、神さまが守って下さったんだと思うんです)

そして今でも、その時のことが忘れられません。

その時身をもって、「人間酔っぱらうと、してはいけないことに、どうしようもないことに、空しいことに、真剣に大胆になって、平気でいけないことをしてしまうような下らなさを持ち合わせているんだ」ということを知りました。

2000年前のエペソ教会の中にも、聖霊に満たされる大胆さを求めるのではなく、酒に満たされてあらゆる大胆になる必要のないことに大胆になるような、主のみこころではないだろう生活をしていた人が、少なくなかったのかも知れません。

Part Four

このエペソ書5：18の神の言葉を理解するにあたって、とても重要になる御言葉が、エペソ4：30と第一テサロニケ5：19の御言葉だと思えます。

エペソ人への手紙4：30（パウロ）

テサロニケ人への手紙第一5：19（パウロ）

「この世界が滅びることは、もうすでに決まっている事実だ」と聖書は語ります。

その滅びの時が先か、寿命が先かは、私たちには分かりませんが、いずれに

しろ、罪ゆえに死をもって私たち皆が滅びる者となってしまいました。

ですが、その滅びの日に滅びることはないという証印を押された証しが、キリストを信じることによって、聖霊様が我が内に住まうようになって下さったということです。

それなのに、第一テサロニケ 5 : 19 にありますように、「その証印となって下さっている聖霊を悲しませるだけでなく、消してしまうような生き方を、神を信じるキリストを信じるという者たちでさえもしてしまう、やりかねない」と、深刻なことを語ります。

私たち人間は、唯一まことの神を忘れ、神を捨て、神から逸れて行くようになってからは、その満たされない承認欲求をありとあらゆるもので満たそうと、ここまで文明なるものを、文化なるものを築いてきました。

ところが、その何一つとっても、私たち人間の根本的な承認欲求を満たすことが出来ません。

何だかいつも不安です。

何だかいつも物足りません。

何だかいつも空しさがついてきます。

どんな喜びや楽しみにも、欠けを感じてしまいます。

そんな私たち人間の底なしの承認欲求がどこから生じているのかと言いますと、「神の霊が私の内におられないというところから生じている」と、聖書は私たちに教えて下さいます。

イエス・キリストが神だと分かり信じる者とされた者たちのうちには、神であられる聖霊が証印としてお住まいになって下さいました。

このからだは、もうこれ以上私のものではなく神のものとなり、神のものであるという事実は、束縛ではなく、自由をもたらしました。

止まることを知らない承認欲求を終わらせました。

私という人が神のものであるということが束縛ではなく、むしろ、偽りのありとあらゆる偶像、神々、アイドルからの解放をもたらし、聖霊がいて下さる、聖霊に満たされるということで、失われていた私という存在のパズルの大きなピースのようなものがピタッとはまりました。

聖霊の満たし以上の満たしはないということを、この身をもって知った人、それがキリスト者ですよね。

そして、その喜びを、人類が失ってしまった最も大切な喜び、救い、満たしを大胆にも語りたい、生きたい、伝えたいと思う生き方。

それが、聖霊に満たされる生き方でしょう。

お酒に酔ってなんかいられません。

酒に酔う必要を感じません。

Conclusion

エペソ 5 : 18 の御言葉、

エペソ人への手紙 5 : 18 (パウロ)

という言葉を使い換えるならば、このようになるのかなと思います。

『酒に酔う必要を感じない。気確かして神様に祈りたい。気確かにして主に賛美したい。気確かにして神の言葉を食したい。気確かにして、主のみこころを生きたい』 そのように生きなさい。』

お酒に寄りかかる人生ではなく、御霊に満たされる人生を生かして頂けるよう祈って行きたいと思います。

お祈りいたします。

祝祷 : エペソ 5 : 18